

●● 観察者と保育者の対話 (5)

……
観察者から保育者へ

観察者 M・S (保育史研究者)

〈二〇〇六年十月某日 都内〇幼稚園にて〉

その日は朝から雨だった。とめどなくあふれてくる、たくさんの人の流れが渦巻く中で、三歳児クラスの畳の空間はちよつと違って見えた。畳が一枚置かれている。そこを、三人の男の子が新聞紙とテープで囲い、嚴重なバリアを作り、プロックの武器を持って、何やら話し込んでいる。初めての場所に自分の居場所が見つからず、この幼稚園を初めて訪れて何となくふらふらしていた私は「ここにしよう」と畳のそばに座らせてもらうことにした。

人懐こい女の子が話しかけてきてくれる。「だ

あれ？」とMちゃん。「K先生のおともだちな」と私。「ふーん」と言つて、MちゃんとAちゃんは私の向かいのテーブルに座った。私はK先生の保育を遠巻きに眺め始めた。

K先生は同じ三歳児クラスの部屋の向こう側にいて、電車ごっこなのか、コンサートごっこなのか、一群の人たちといすを並べて何やら楽しそうな笑い声を上げていた。子どもたちは何か困ったことや報告するようなことがあると、K先生の背中にびたつとくつついて、K先生の耳元に伝えていく。その様子は、初訪問で多少なりとも緊張し

ていた私を、かなりほっとさせた。「いいよいよ、なんでもいいよ。大丈夫大丈夫、なんとかなるって」。そんなまなざしで、こうして日々受け止められていたら、柔らかな身体になっていくだろうと思つた。先生の背中にびたつくつについていく、子どもたちの身体。こんな身体を、今の時代に、どれだけの三歳の人たちがもつことを許されているだろう。畳バリアの方から見ても、K先生の背中はかなり近く見える。

居場所は、先生の身体という軸を中心にさまざまに構成されているようだった。では、子どもたちが先生から離れていくのはどんな時だろう。よく見ていると、それは、自分のロッカーに走っていった、小石やら紙くずやらの宝物を自分のかばんに詰めにいく時が多い。自分の家、お母さんや

お父さんと、そこでつながっているのかもしれない。それぞれの人が、それぞれの拠点をもつて、雨の日の保育室にすることが、だんだん見えてきた。

私がこんなことを考えながら、ぐるりと部屋を見回していると、「どうしておしゃべりしないの？」と向かいに座ったMちゃんに聞かれる。確かに。保育の観察とはいかにも難しい。関係ができ始めた大事な人を目の前に、「おしゃべりしないことになつてるの」と小さな声で伝えなくてはならない。いつもの彼女たちの場所に勝手に入ってきて、あたりをキョロキョロ見回して、しかも何のあいさつもなしである。怪しまれて当然。にもかかわらず、「おかしいよね」「そんなのおかしいよね」とMちゃんとAちゃんは、変な訪問者

の私を受け入れるように顔を見合わせて笑ってくれた。バリアの中に拠点をもち、世界に対する信頼の土台をつくっていた男の子たち。彼らもまた、自分たちの安全を守りながら、他者として参

……… 保育者から観察者へ

保育者 T・K (三歳児クラス担当)

子どもの思いに応えるからだ、拒絶しないからだであることを、私は大事にしたいと思っただけである。自分の背中というのはいかに、不可視であるから、観察者が保育者の背中から見える子どもとのかかわりを、保育を語る切り口の一つにしてくださったことが、まずとてもありがたかった。しかもそれが、背中を刺すようなまなざしではなく、温かく見守ろうとするそれであったこと。このことのもつ意味は、決して保育者観察者の双方

入した私に居場所を与えてくれた。この訪問では、保育室に在る子どもたちの身体が何らかの拠点をもちながら、意外にも異質な外部に開かれていたことを、興味深く見させていただいた。

にとつて看過すべきことではない。記録の後半で、MとAとが、自分たちに肯定的な気持ち向ける観察者を、もはや仲間と認識して、言葉のやりとりをしていることにも、それは表れていると思う。

また私は、観察者の記録から、あるエピソードを想起した。SとT (共に三歳男児) のことである。五月の半ばごろ、Sは、同じクラスのTをひどく恐れ、保育者のごく近くで、おんぶされるな

どして過ごす時間が長かった。一方Tは、紙やブ
ロックで作った剣を振り回し、傍目にはいささか
粗暴な印象があった。登園時には泣き泣き保育室
に現れる日の続いたSであったが、いつのころか
らか、淡々と登園するようになる。朝、登園時間
が近づくと、「Sくん今日も、K先生の背中に行
くん。背中に行くと、気持ちの下に下りるん
だ」と言っただけぶんを自分から背負うのだと、S
の母親が教えてくれた。Tもまた、幼稚園での生
活の中で、抱かれたりもたれたりのかかわりを経
験していく。

二学期になると、背中にふーつと来る感じか
ら、Sかな、と思うとTだった、ということがと
みに多くなった。今やSとTは、似た雰囲気のか
らだの委ね方をする人たちになっている、という

のは、何とも不思議なことだと思う。

目でとらえやすい活動に対しては、言葉でも対
応しやすいが、子どもが動かずにいる／戸惑う／
迷うような時、それを受け止め、寄り添うには言
葉は説明的、選択的に過ぎる。物言わぬ背中
子どもと同じ向きに前方をとらえ、そのありよう
を拒むことなく、ただ受け止める。観察者の記録
を支えに感じて、背中に張りついてくる子どもの
心地よい重さを、私は今日もしみじみと味わって
いる。

